

ショートメッセージ

2022年8月21日(日)「それでも神さまに」

暗唱聖句: 神の御計らいによって、侍従長はダニエルに好意を示し、親切にした。(ダニエル1:9)

ダニエル書は、聖書の中での位置づけは、キリスト教では「預言書」(エゼキエル書の後)ですが、ユダヤ教の分類では「諸書」(「黙示文学」として)になります。ダニエルという名前の意味は「神はわたしの裁き人」あるいは「神は裁いた」であり、伝説的な裁判官を象徴する名前として使われてきました。旧約聖書の中の人名としては、歴代誌上3章1節に、ダビデの次男の名前として使われています。エゼキエル書の中では最高の義人として、ノアとヨブに並んでその名が挙げられています。

ダニエル書の中では、前半1章から6章においてはバビロンの王ネブカドネツアルの時代からペルシアの王キュロスの治世に至るまで、帝国の宮廷で活躍した敬虔なユダヤ人として登場しています。後半7章から12章においては、ベルシャツアル、ダレイオス、キュロスの治世に四つの幻を見て、それを記録したという形式を取り、基本的にダニエルが一人称で幻を見て書き記したという形になっています。

典型的な黙示文学の特色として、幻を見た人物が伝説的人物の名を借りて幻の内容と意味を書き記すということがあります。ダニエルは伝説的人物として、イエス時代の前の世紀には大変人気のある物語の主人公として度々登場しています。

1章の物語は、ダニエル書前半の物語部分と後半の幻部分全体の導入の役割を担っています。1章は素朴な話ですが、ダニエル書の性格を把握するための重要な章と言えるでしょう。

まず、バビロン捕囚に行ったユダ王国の4人の青年の紹介がされます。ダニエル書前半の物語部分の主演はダニエルですが、3章はダニエルは登場しません。この1章において4人の紹介がなされているのです。次に年代について見ていきたいと思えます。1章1節にバビロン捕囚の年はユダの王ヨヤキムが即位して3年目(紀元前606年)とありますが、第一回バビロン捕囚はヨヤキムが死んでそれに代わったヨヤキンの治世初めの時とされています。紀元前597年のことです。バビロン捕囚の見解はいくつかありますが、新共同訳旧約聖書注解を用いてまいりたいと思えます。この1章に記されている記事はヨヤキン治世1年目のことであろうと思われれます。シNealとはバビロニアのことであり、ネブカドネツアルは神殿の祭具類をシNealに引いて行き、自分の神々の宝物倉に納めたのですが、この箇所は後の5章3節の伏線となっています。物語部分の全体にかかわる序論として、この1章は見るができます。

捕囚として連行したユダヤ人の中から、直ちに宮廷に仕える者として、能力のある青年を選び出し教育をすることは、考えられないことではあるのですが、このような措置がなされた背景に目を向けてみましょう。ネブカドネツアルは、自分の国を支配するに当たって、征服した国々の王族から自分に仕える者を選ぼうとしました。そうすることによって、長きに亘り諸国民がバビロンに従属すると考えたのでしょう。そしてネブカドネツアルが求めたのは「イスラエル人の王族と貴族の中から、体に難点がなく、容姿が美しく、何事にも才能と知恵があり、知識と理解力に富み、宮廷に仕える能力のある少年」でした。このことは、ダニエル書を書いた共同体が知的・宗教的に優れた階層の集団であったということ想定することができます。

ヨハネの黙示録と並んで、この世の終末の様子を予告する、有名な預言を残したダニエルです。ユダ王国が新バビロニア王国に滅ぼされた時、多くのイスラエル人が殺されましたが、優秀な人物だけはバビロニアに連れて来られ、用いられることとなりました。そしてダニエルは、王の夢の解きあかしをし

出世をします。強国メディアの王に気に入られたことで、家臣たちに憎まれ、同僚の罠にかかります。ペルシアの王の時には多くの預言をし、主に語りかけられます。現代にまでも及ぶ預言を残すダニエルは、主によって選ばれたイスラエルの一人と言えるでしょう。

1章のテーマとなるのが8節から16節であろうと思われます。ダニエルはバビロンの教育とバビロンの名を与えられましたが、自分はユダヤ人であること、イスラエルの神を信じる者であることを忘れることなく神に与えられた良心に従うために、バビロンで与えられるものを拒みました。ユダヤ人は聖なる神を信ずるゆえに、同化を拒否すること、宗教的良心を守ることは、大変重要なことであったと思われます。そのような事情を踏まえた上で、食事の律法を守ることの正当性と合理性を主張しているのでしょう。食事の律法は、他民族、他宗教の人々と安易に同化してヤーヴェの民としての独自性を失うことがないようにするということが主な目的です。レビ記の食事の律法の後にも（11章44節～45節）、申命記（14章2節）にも、イスラエルは聖なる神に選ばれし民であるので、聖なる者とならなければならない、と命じています。このことから、食事の律法を守ることの重要性と、捕囚後のユダヤ人にとっての連行された地での環境からの区別、儀礼的遮断を行うことは聖なる神への信仰の証だったのでしょう。

ダニエル書の歴史的背景を見てみますと、ダニエル物語の最初の書き出しの「ユダの王ヨヤキムが即位して三年目のことであった」（1章1節）は、紀元前606年となります。

ダニエル物語において、イスラエルとユダの歴史は、意図的に時代錯誤的な記述を織り込んでいると思われる点が少なくないと言われています。著者の歴史的意識への強さがダニエル書全体において認められており、世界史における、「神の選民イスラエルの運命とその苦難」について、現実との歴史に関わる観点から捉えてのことだと言われています。物語の発端はバビロン捕囚にさかのぼり、新バビロン帝国の興隆から、ダニエル書の著者自身の時代にユダヤ人を激しく弾圧していたヘレニズムのシリア帝国にいたる諸帝国の運命を、神学的な観点から繰り返し取り上げています。そうすることで、帝国の支配下にあったイスラエル民族の苦難の歴史を、自らの罪責問題をも含めて、神の歴史支配において捉えようとしていると思われます。

幻の記事の間に、後から付け加えられたと言われているダニエルの祈り（9章4節～19節）などは、まさにそのことを現わしている箇所でしょう。

聖書の世界には欠かせない「預言」と「預言の書」であり、「主」からのメッセージが預言者を通して語られます。現代においても、聖書を通して主は私たちに語りかけてくださっています。そして、み言葉に真摯に向き合った時、聖書は生きる力、困難を乗り越える術を、密かに語りかけてくださっていると思います。全ての人に平等に、同じ語りかけをしてくださっています。

「預言書」とも「黙示文学」とも言われているダニエル書を通して、6回に亘ってみ言葉をいただきますが、ダニエル書の歴史的背景と現代の私たちとの共通点を見つけてまいりたいと思います。

● 分かち合い

- ・内紛と聞いた時何を考えますか？
- ・平和とは、なんでしょう・・・？

(担当：H.I.)



ショートメッセージは、教会ホームページから動画でも視聴できます。

左のQRコードを読み込むか、スマホ・PCからご覧の方は[こちら](#)をクリックしてください。

公開：8月18日（木）～